神宮の神様は微笑んだ

『古希の会報告』

少し遅れて熱田神宮の正門に近づくと、皆が手を振って、私の名前を呼んでくれました。遠くにいても、マスクをしていても、お互いが分かりあえる一これこそが高校時代の同級生。私は嬉しくなって、直ぐに 52 年前にタイムスリップすることが出来ました。華やいだ中にも、厳かな雰囲気。皆若々しく、頭髪以外は年をとっていませんでした。着物姿で駆けつけてくれた女性もいて、場を一段と盛り上げてくれました。

本殿へ手を合わせ、古希の報告と感謝の気持ちを伝え、健康長寿、そして病に倒れた友の早期快復を願うと、次のイベント会場へ向かいました。

長く健康でありたいというつもりなのか、単に、熱田神宮といえば、蓬来軒のウナギと反射的に出てきたのかは判りませんが、とにかく最初からウナギと決まっていました。ただ蓬来軒は、予約できません。

「もっと旨くていい店があるよ。予約できて、部屋を借りきれて」。それが三福でした。

今回のツアーは、コロナ対策のため、少人数に絞られました。「今までのクラス会常連メンバーのみに案内を出した」(平野幹事)

その結果、女性 9 名、男性 3 名という片寄った編成になりました。

数少ない男の私は、大奥に挑む将軍になれるかも。その期待は、三福に着くまで破られませんでした。

三福は、昨年古希を迎えた古い鰻屋さんです。レトロな感じが懐かしい座敷は、人数にぴったりの広さでした。

席に着くと、「腰骨様」達は早速銘銘てんでに話をはじめ、第三の男は次々に高級酒やらつまみやらを注文し始めました。店の娘を可愛いと気に入りご満悦でした。将軍の座をとられた下足番の私は、腰骨様達にも相手にされず、将軍様の酒にご相伴を預かるばかりでした。

そんな一同が一斉に静まる瞬間がやってきました。

ウナギを口に入れた瞬間がまさにそれです(うまっ)。

鰻の濃厚で豊潤な味わいに涙を流す者一はいませんでしたが、名古屋いち、いえ、東海道随一の旨さに、皆、会話も忘れていました(食べ終わるまでは)。

プーチンに食べさせて終わらせたいこの戦争

腰骨様たちのケンケンガクガクな会話は、その後の喫茶店でも続き、男性 3 人を置き去りにしたのでありました。